

歐陽文彬 著
三好一 訳

穴にかくれて十四年

中国人俘虜劉連仁の記録

新読書社

にかくれて十四年

中国人俘虜劉連仁の記録

歐陽文彬 著

三好 一 訳



新読書社

1959年2月20日初版発行

穴にかくれて十四年

¥ 220円

著 者	欧 陽 文 彬
訳 者	三 好 一
発 行 者	藤 山 純 一
印 刷 所	新友印刷工業株式会社

発 行 所 東京都千代田区神田錦町 3 の 19
第二千代田ビル 振替東京66867
新読書社出版部電(29)8095

まえがき

一、これは、昭和二十年の七月、北海道のある炭坑から脱走して以来、まる十三年間も山中に逃亡し、穴居生活を続けて、昨年（昭和三十三年）二月九日、ついに発見され、その春に本国に奇蹟の生還をした中国人、劉連仁さんの体験記録である。

二、劉連仁さんは文字を知らないので、上海の「新民晚報」の記者・歐陽文彬さんが、劉さんの話をくわしく聞き、資料を細かく調べてまとめたものが本書である。

三、劉連仁さんは、〃俘虜〃といつても、軍人ではなく、ただの農民であつたのを、日本軍が強制的に日本に連行し、俘虜として強制労働に服せしめていたものである。

したがって、厳密にいえば、「国際法」上の〃俘虜〃に該当しない、一種の強制連行者なのである。

だから、副題で〓中国人俘虜〓と書いてしまうのには、若干の疑義があつたが、わかりやすくするために、あえて〓中国人俘虜劉連仁の記録〓とした。

四、本書は日中友好協会、日本平和委員会、中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会、中国帰還者連絡会、日中国交回復国民会議の五団体の後援のもとに出版された。

五、翻訳には長南芳樹、阿部達也、児玉華子、外松敏子の四人がそれぞれ分担してあたり、三好一がそれを校閲して総括した。

六、なお、本書を刊行するにあたって、理論社社長小宮山量平氏の絶大な御厚情と、華僑総会理事、呉修竹氏の友情あふれる御支援をうけたことを、とくに記しておきたい。

翻訳者代表 三 好 一

目次

目次

まえがき	一
一通の手紙	七
白山丸	三
とらわれの身	四
生き地獄	五
逃亡	六
苦難の道	六
雪穴の冬眠	七

目 次

海へのこころみ	一〇七
おれは生きてゆく	一〇六
山のなかの幾歳月	一〇七
獵師に発見さる	一〇一
ゆるがぬ証拠	一〇四
闘いの一頁	一〇五
ふたたび故郷へ	一〇一
あとがき	一〇三

穴にかくれて十四年

中国人俘虜劉連仁の記録

歐陽文彬著

三好一訳

一通の手紙

一九五八年の二月十五日は旧暦の正月八日にあたる。春節（旧正月）が過ぎたばかりだが、生産大躍進の潮はいままさに中国各地にわきたとうとする直前だった。山東省高密県井溝郷の建国農業生産協同組合では、春の耕作についての研究会がひらかれていた。チリンチリンという自転車のベルの音がきこえたかと思うと、一通の手紙を手にした郵便配達夫がはいってきた。

「おまえさんたちの組合に、劉志元^{リウヂュン}という人はおらんかい」

みんなしばらく頭をひねっていたが、どうも思いだせない。副組合長の王洪富^{ワンホンフー}が手紙をうけたが、表に△山東省諸城県紫溝郷草坡村^{チウチョン チヤイコウ ツァオポ} 劉志元殿^{リウヂュン}と書いてある。思わず、

「所書きがまるつきり違つとるわい」といった。

「この手紙は諸城県^{チウチョン}から高密^{カオミ}に転送されてきたんだがの、柴溝郷^{チャイコウ}は解放後、高密に編入された。ところが、柴溝郷には草坡村^{ツァオポ}というのはないが、おまえさんたちの組合には草泊村^{ツァオポ}という村があるだろ。草泊と草坡は字は違うが、音が同じだ。それでもつてきてみたわけだ」

王洪富はしきりに考えながらいった。

「草泊村というのはある。以前柴溝にあつたのは事実だ。しかし、劉志元というのは、おらんようだ」

そのとき、痩せぎすの一人の青年が急になにかを思いついたように叫んだ。

「劉連登^{リウリェントン}のつつあんが劉志元といわなかったか」

するとそのわきにいたのが、

「なにいつてやがる。劉連登のつつあんは死んでもう五年になるんだぜ」

それでもその青年は、

「よくみてみな」

といいながら、手紙をとって、裏をひっくりかえしていた。そして、急にそうだと跳びあがつた。

「まちげえねえ、劉連登のいちばんのあんちゃんからの手紙だ」

劉連登のいちばんのあんちゃん——といわれても、みんなの頭には、とつさに思い浮かばない名前だった。この建国農業生産協同組合は四つの村からできている。王洪富は顧家嶺^{クチャリシ}村のものである。この日会議にきた組合幹部には、このほか前丘家村と後丘家村のものがいたが、草泊村のことは、あまりわからない。草泊村のこの青年は常効^{チャンシイイシエン}先^{セン}といい、劉連登とは大のなかよしだったか

ら、とっさに思いついたのだった。常効先の話で、二、三の年長者もやつと思いだした。が劉連登のいちばんのあんちゃんは、日本人にとっつかまってから十四年、まったく音信がない。生きているとは、どうしても考えられない。

みんなでのぞきこんでみると、手紙はなるほど日本からだしたもので、劉連仁・リウ・レン・拜とはつきり書いてある。もう一度受信人の番地をたしかめると、十四年まえのふるい番地ではないか。十四年も消息不明なのだから、とつつあんが死んだのを知らないのはあたり前で、劉志元に手紙を書いても不思議はないわけだ。

こいつは、ふつうの喜びごととは、少しわけが違ふぞと、すぐさま話に花が咲きはじめた。劉連仁が生きていて、十四年間もどうして便りがなかったのか。いままでなにをし、どうやってくらしていたのか。いろいろと考えてみたが、どうも腑におちない。そのうち常効先がいつた。

「くだらんせんぎをしてもはじまらない。村にもつてかえつて劉連登に封を切らせれば、すぐわかることだ。とにかく會議をやつて、終つたらさつそくもつてつてやることにしよう」

會議が終つたのはだいふ晩かつた。常効先が手紙を村にもちかへつた頃は、みんな寝しずまつていた。劉連登を訪ねようと思つたが、明朝にしなさいと家のものがいう。常効先はその夜どうしても睡ることができず、一晚じゆう、まんじりともせず寝がえりばかりうつていた。

劉連仁が日本軍につかまえられたところ、常効先はまだ子供だった。だが劉連仁の家のまずしさ

はいまもありありと記憶にのこっている。劉連仁には、連義、連福、連登、連升の四人の弟と連英という妹がいた。連仁を生んだ母はやく死に、四番目と五番目の弟と妹は継母の子だった。弟と妹たちは小さく、五番目の連升は連仁より二十八も年下だ。家の生計は主に連仁の肩にかかっていた。かれの家は貧農で、家族が多くて食物が足らず、そのうえ地主から土地を借りて耕していたので、その日その日のくらしも並大抵でなかった。劉連仁がつれていかれてから、それがいつそうひどくなつたのはいうまでもない。かれがいなくなつて二カ月のち妻は子供を生んだ。その子は今年十四になるが、父親の顔をみたことがない。父についてはただ、家のものが、なげき悲しんでいるのをみ、また村じゅうの人が父親がどんなに好人であつたかとか、東洋鬼につれていかれた模様を喋っているのを聴いていただけだ。お祖母さんがつけてくれた名前は、^{パツアル}△盼児^{シュアル}または△尋児^{シュアル}というのだが、その意味は、父親が帰ってくるように、父親を探しだせるようにということだ。お祖母さんは、わが子のことを悲しんだあまり眼を泣きつぶしてしまつた。祖父さん、祖母さんの二人の年寄りには、夜となく昼となく、息子の身を案じつづけ、嘆き悲しむうちに、次々と病氣にかかり世を去つた。二番目、三番目、五番目の弟と劉連仁の妻とその子供はつぎつぎに東北（満州）に渡つていったし、妹は早く嫁にいった。いま家にのこっているのは四番目の弟連登一人だ。これも結婚して子供が生れ、昔からの家に三人で住んでいる。この劉連登は、復員軍人で、組合では生産大隊長をつとめ、ひじょうに人柄もよく、常効先とは仲のいい

友達だ。常効先は、少しでもはやく劉連登に手紙のことを知らせねばと気がせいてならず、鶏が鳴くのを耳にするが早いか、まだ暗いうちにとび起き、息せき切つて劉家にかけつけた。

一息に劉連登の家の門口までかけつけた時は、あたりはまだ薄暗く、表門はびったり閉ざされたままで、劉家の人々はまだぐっすりと睡っていた。常効先は扉をドンドンと叩きながら、声からして叫んだ。

「連登君！ 連登君！ 早く起きてくれ！」

劉連登は驚いて目を覚ました。一体何事が起つたのだらうと、急いでオンドルをとびおり表へ出てきた。妻の丘桂榮チウケイロンと三つになる子供もびっくりしてしまった。劉連登は、常効先の声だと判るとすぐ門を開けたが、わけを聞くまでも与えず、常効先はいきなり大声で叫んだ。

「いい知らせをもつてきてやったぞ！」

わけのわからぬ劉連登はあつけにとられた。

「いい知らせつて一体なんだね？」

常効先は手にもった手紙をつきだし、

「ホラ、いちばんのあんちゃんからの手紙だよ」

うけとつた連登は、手の甲で眼をこすり、あわててみようとしたが、あいにく夜明けのうす明りの中では、茶色の封筒に書かれたペンの字はまるで見えはしない。へやにとつて返すと妻にラ

ンプをつけるようせかせせながら、常効先の手をグイとひっぱった。

「ホントかね。おまえどこからもつてきたんだ」

常効先はニコニコしていった。

「大丈夫、おまえのいちばんのあんちゃんからだ。組合からもつてきたんだ」

丘桂榮は、この家に嫁に来てからまだ四年、いちばんのあんちゃんの顔はみたことがないが、あんちゃんのことを他人がしゃべっているのをきいたことは、度々ある。いそいでランプに火をつけると、自分は字は読めないものの、そこはやはり気になって、そばへきて手紙をのぞきこんだ。劉連登が灯に近づけてみると、間違いない、いちばんのあんちゃんからの手紙だ。うれしさの余り、封を切る手がブルブルふるえた。便箋をとりだし、開いてみようとする、三人の頭が、一カ所にかちあつた。おまけにランプの光が暗いのでますます読みにくい。常効先がいった。

「おまえ読めよ、おれたちはきいてるから」

丘桂榮もいった。

「そう、はやく読んで」

劉連登は「ようし」といって読みはじめた。

御両親さま、

一通の手紙

お別れしてから、もう十数年になります。手紙を一通もおくらず、きつと御心配をおかけしたこととたいへん申し訳なく思っております。なにとぞ御許し下さい。いまわたしは北海道の札幌市におります。札幌市在住の中国人同胞の面倒をうけており、すべてがうまくいっています。身体もいたってよいですから御安心下さい。ただ、まだしなければならぬことがあるので、もうすこしここにいなければなりません。かたがついたら帰ります。どうぞ御心配下さらぬように、くれぐれも御身体を大切に。それから妻はどうしているでしょう。よろしく御願います。

みんなどうぞ元気で

二月十四日

劉連仁 拜

手紙を読み終った劉連登は、あんちゃんが無事にまだ生きていて、まもなく帰れるということを知り、これはまたとないめでたいことだとは感じたが、それ以上にも考える余裕はなかった。三人は、

「ほんとによかったなあ」

とたがいに喜びあったが、やはり常効先に

「はやく、あんちゃんに返事を書けよ」

といわれると、連登はじめて夢からさめたように、あわてて手紙の書ける人を探しにでかけていった。連登は、いくらか字を知ってはいるが、書くことはできない。代筆してくれる人をつけて、すぐ返事を書くとともに、東北（^{トシベイ}満州）の兄嫁にもこの吉報を知らせ、一家が一緒に暮すため甥をつれて山東に帰ってくるよう、手紙を書いた。

手紙をだしてしまうと、こんどはあんちゃんに落着いてもらう住いについて妻の丘桂榮と相談をはじめた。かれらのこのふるい家は、ほかの家と同じように泥壁にわら葺屋根で、五部屋が一ならびになっている。庭にある低い土塀が、東の二間と西の三間を区切っている。劉連登の一家三人は西側に住んでいて、東のへやには、雑多なガラクタが入れてある。劉連登が、

「あんちゃんはでいてたきり十四年も便りをよこさなかった。これにや、かならずわけがあるにちげえねえ。手紙には、十四年間の苦勞にはふれてねえが、家のものが心配するのを心配したからにきまつてる。こらあ、よつく段取りつけといて、帰ってきたら、ゆつくり休んでもらわにや」というと、

丘桂榮も「そらあ、そうともさ」といい、西側の部屋をあんちゃんに譲るために、かれら二人は東の部屋へ引越すことにきめた。

それから数日して、建国協同組合副組合長の丘沢禄が二月二十八日付の人民日報をもって訪ねてきた。新聞には入ふたたび陽の目をみることできた劉連仁^{チウレンイン}Vという見出しで、劉連仁が捕え